

満州

ハイラル陣地で戦つて

愛知県 八木文吉

一、召集令状

昭和六年満州事変に始まり、翌七年には満州国が誕生したが、戦火は支那大陸に及んで止まるところを知らず、昭和十六年十二月八日大東亜戦争が始まり、北は満州から支那大陸、南は東南アジアから太平洋へと戦場は広がり、そのために兵員、武器、弾薬など第一線に十分な補給が逐次困難となり、戦況は日に日に不利となってきた。

これが挽回のため最後の切り札としていた精鋭なる

関東軍を南方に転用せざるを得なくなり、昭和十九年より関東軍は統々と南方に向かって行った。

このように関東軍が転出して手薄になった満州に、その補充として私は昭和十九年十一月臨時召集された。時に私の年令は三十四歳、留守家族は両親と妻に子供二人の五人だった。満州ハイラルの独立歩兵第五八六大隊独混第八十旅団（鋭鋒）に入隊すべく十一月初旬博多湾を出帆した。輸送船は波高き玄界灘を釜山に向けて航行した。

当時、既に日本の近海は敵に制空権を握られており玄界灘にも敵潜水艦が出没していた。従つて我々の乗った輸送船も灯火管制を行い真つ暗な海を走り、船内もまた暗く不気味な夜を厳重な警戒の下に翌日釜山に着いた。

釜山からの列車は防諜のため夜間走り、途中チチハル等に停車、興安北省のハイラルに着いたのは三日後の夜だった。

二、嵯崗の部隊に入隊

ハイラルに着いた我々一五〇名は直ちに独歩五八六大隊に入隊したが、その中の五〇名はハイラル西方一〇〇キロの草原の中の田舎町・嵯崗駐屯の中隊に配属となり私もその一員となった。翌朝直ちにハイラルを発って嵯崗に行き、五〇名は四班に分かれ、私は第一班に編入された。

当時の中隊長は多田秋衛中尉で班長は森永伍長、教育係は山内上等兵で他に二〇名の一等兵の古兵がいて我々初年兵を合わせて一班が三五名で、四班で一個中隊を形成していた。

入隊後は毎日毎日演習の明け暮れだった。また嵯崗の西三十キロのジャライノール町には同じ大隊の二個中隊が駐屯しており、満州里には大隊本部と一個中隊や輜重隊、鉄道隊の一部もいて、国境の守備に当たっていた。

しかしどの部隊にも重火器は全く無く、歩兵銃が精々で、万一の場合、とてもソ連軍を向こうに廻して戦える装備ではなかった。

日曜日の外出は汽車に乗ってハイラル行きが唯一の楽しみだったが、単独外出は許されず、必ず引率外出であった。嵯崗に停る列車は一日一往復だけで冬などは時々列車が遅れる場合もあり、そんな時は折角楽しみにしていた外出も中止になり、初年兵同士で大いに落胆したものだだった。

中隊長の多田秋衛中尉は私の妻と同じ名ということもあって印象づけられ、大変目にかけて頂いた。

三、八木真少尉との出会い

昭和十九年の暮れも近い日、中隊長に呼ばれた。私は中隊長が私のような初年兵を直接呼ぶとは、何事ならんと心配しながら、緊張して中隊長の部屋に入り直立不動の姿勢で用件を伺ったところ、中隊長から「お前、八木真という少尉を知っているか」と聞かれたので、直ちに「ハイ知っております」と答えると、今日八木少尉から電話があり、正月の休みに面会にくるか

ら私に伝えて欲しいということだったので、ほっとした。

八木少尉とは親戚の間柄で以前より満州に居ることは知っていたが、まさかハイラルに居るとは思わなかった。

当時、八木少尉はハイラルの独立混成第八〇旅団の司令部にいたので名古屋から召集兵が入隊することを知り、その名簿を見たら、私の名前があつたので判つたということ、私は驚きと嬉しさを混同しながら正月のくる日を待った。本当に名古屋から満州の西の果ての嵯岡にきて身内に会えるなんて思つてもいなかったのでその幸運を喜んだ。

丁度八木少尉のくる日は我が中隊の銃剣術の大会日であつたが、中隊長は「八木お前に休暇やるから一日中ゆっくり八木少尉と会うがよい」と言つてくれた。

そして隊内に適当な部屋がないから私の部屋を使えと言つて中隊長の部屋を空けてくれたのは重ねて感激したものだつた。八木少尉との出会いは、こうして偶然とはいえ周りの人の好意に包まれて、故郷の話に時

の過ぎるのを忘れたほど嬉しかつた。少尉も再会を約し、お互いの健闘を祈りながら帰つていかれた。

一期の検閲が済み私も一等兵に昇進した。それから一ヵ月過ぎ、私はソ満国境近くの監視哨勤務を命ぜられた。監視哨の兵舎は周りに壕が掘つてあり、大体二時間交代で壕の外に行つて国境付近を監視する者と、兵舎の周りを巡回する者と二手に分かれていた。

時には蒙古人の飼つている馬や羊が壕を越えて柵の内に入り込み、これを追い出すなどユーモラスなこともあつて二ヵ月が過ぎたが、入隊当時のように演習につぐ演習ということもなく、国境線が平和であれば、のんきな勤務であつた。

四、転 属

我々嵯岡の部隊にも二十年三月には内地から応召兵が入り、五月には在満の開拓団や満蒙開拓青少年義勇隊から応召兵や現役兵が入隊してきたので人員も多くなつた。来る日も来る日も訓練に訓練を重ねていたが二ヵ月や三ヵ月の訓練では到底実戦に使えるような兵隊は出来上がるものではなかつた。

七月に入って間もなく膨れ上がった部隊の大巾な編成替えがあり、ハイラルの挺身隊に行く者、原隊に残る者に分かれることになった。そして多田中隊長はハイラルの独立混成第八〇師団の満州里向地視察隊に転属となった。

今までは独歩第五八六大隊の嵯岡派遣中隊に在籍のままソ満国境の監視という任務であったが、今回の転属により国境監視専門の向地偵察隊員として勤務することになった。

向地偵察隊とは軍が派遣した国境偵察隊で、今までは警察隊がやっていたが、ソ満国境が一段と不安を増してきたので関東軍として独自にソ連軍の状況を直接監視する必要に迫られ、向地偵察隊を編成してその任に当たらせ、逐次ソ連軍の動向を本部に報告させるようにした。

当時、満州里向地偵察隊の隊長は山田靖春中尉であった。私は転属しても暫くは国境第一線の監視に行くこともなく本隊にいたが、新編成のためか八月に入っても部隊はなかなか落ち着かなかった。

五、ソ連軍の不法侵入

八月九日の午前三時頃、突如非常呼集がかかり、完全武装して衛兵所に集合せよとの命令である。今日の呼集は、ばかに気合が入っているなど異常を感じながら完全着装して我先にと飛び出して野外の広場に集合した。

その直後、砲声が一発、続いて第二弾目が鉄道隊の兵舎に命中した。隊長は整列した我々に「ソ連軍は不法にも国境線を破って侵入してきた模様である。本隊は此処での戦を避けてハイラル方面に撤退する」と命令した。

昨年までの満州には日本最強の関東軍がいたが、そのほとんどが兵器と共に南方に転進し、そのあとには質量共に劣る員数だけの留守隊が配備されていたので、ここで戦えば全滅は必至であり、また市街戦となれば多くの在留邦人を巻き込むことにもなり、その犠牲は計り知れないことになる。隊長は判断されて撤退を決意されたようである。

六、満州里撤退

後方からの敵の戦車や砲弾に追われるようにして満州里を後にした。敵の攻撃を少しでも避けるには鉄道沿いの幹線道路を通つては危険である。従つて敵の戦車や大砲の通れない山（丘）道を進むことになり、山越えに次ぐ山越えの強行軍、それでも後から追つてくる敵に発見されて倒れる戦友を助けることもできず夢中で歩き続けた。ようやく敵の見えない山の反対側に行き、これ以上歩けない落後者も出始めたので小休止した。

満州里の部隊を出る時は完全武装で出たが、とても重くて強行軍に耐えられず、だれ言うとなく一つづつ捨てながら歩き、今、身に着けている物は銃と剣と空っぽになった水筒だけである。

再び歩き始めたが我が身を守るものは銃一丁に対し敵は五〇トンもあるという大型戦車に砲を構え、情け容赦なく我々を追いまくつてきた。満州里を九日の未明に出でから、もう夜中の十一時を過ぎた。その間何も飲まず喰わずで歩き続けようやく札賚諾爾（ジャヤライノール）の近くのオロゼータと思われる処までき

た。ここで付近の軍、官、民と合流し総勢約千人位になった。そこで幹部の人達が今後の方針を協議した結果、先ず邦人女子と負傷兵約二〇〇名を七台のトラックに乗せて一〇〇キロ後方のハイラルまで避難させることになった。

これには当然護衛兵を付けねばならず大木山監視哨の哨長だった井上重利さんが護衛の責任者として隊長から指名され、一台のトラックに、二、三名の護衛兵が付くことになり人選に入ったが、大多数の者は本隊と行動を共にすることを望んでいたようであつた。

そこで私は率先して護衛兵となることを申し出て婦女子と共にトラックに乗り込み札賚諾爾を發つたのが午前二時頃であつた。

この輸送隊も婦女子と負傷兵合わせて二〇〇名に護衛兵は僅か一八名、しかも幹線道路を通らなければならず、もしソ連軍に見つかつたら最後だと思ひながらも、非戦闘員である婦女子だけは何とかハイラルまで届きたいという心境であつた。

途中の出来事も一つ一つ記憶する心の余裕もなく、

ただ早く早くと自動車の尻を叩きたくなる思いであった。また戦いて死するは兵の常なれど、ハイラルには八木真中尉や多田秋衛中尉もおられるはずなので、その方々に一目会ってから死にたいと思っていた。

七、戦闘中のハイラルに着く

幸いにも途中ソ連軍に遭遇することもなく十日の夕刻ハイラルの松山付近に着いた。

市内に入ると護衛として付いて来た我々兵隊はトラックから降り婦女子と別れて憲兵隊に連絡に行ったが、既に戦闘配備に付いたのか誰もいなかった。また近くにあった兵舎に誰かいるかと思つて行つて見たが、この兵舎は爆撃を受けたのか営庭に大きな穴があり建物は壊れて見る影もなかった。

夏のハイラルは六時といつてもまだ明るい、東北部の安保山方面は激戦中の模様で、ソ連軍も市内に入ってきているとの情報もあり、ここまで来て敵に見つかつては大変だということで、辺りが暗くなるまで行動せず、木陰に退避することにした。ようやく暗くなつた十時頃班長が二地区（河南台）に連絡、我々も河南

台を守るべく守備隊に合流した。

陣地に入ると自衛隊の人達が「御苦労さん、よく札竈諾爾から来られたね……とに角食事をしなさい」と婦人連が握り飯を出してくれた。昨日の朝からほとんど飯を喰っていないので、この握り飯に飛びつくように口に入れた。だが撤退途中喉が渴き泥水でも何でもかまわず飲んできたので喉が腫れていてどうしても飯が喉を通らない。苦しがつている私を見ていた一人の婦人がそれでは、これを飲みなさいと缶ミルクを出してくれたのでこれを飲んだ。昨日からろくな物は食べていないし、このミルクの味は格別であり、あの時の嬉しさは今でも忘れられない。

陣地より四方を見れば一地区（安保山）は敵の戦車や大砲で激しく攻め立てられており、二地区（河南台）にも敵戦車の攻撃が始まった。札竈諾爾からきた我々には、「まだ疲れているだろう、敵の攻撃も今日は大したこともなさそうだから今のうちに少し休め」という命令が出たので壕の中で深くねむった。

八、戦闘配置につく

一夜あけた十二日、昨夜のねむりですつかり疲れも取れていよいよ戦闘配置に付けとの命令が下り前線の壕の中へ入って行った。

その時、奇遇にも嵯岡の部隊でお世話になった森永班長と一緒に、当時の戦友、拝藤、村瀬、鈴置等九名とも合流した。

嵯岡からどのようにして撤退してきたかと聞けば満鉄の線路をハンドカーに乗って脱出して来たが、嵯岡の本隊はまだ来ていないとのことだった。私も満州里から徒歩で札賚諾爾まで来て、婦女子撤退の護衛兵としてトラックに乗り込みハイラルまできたなど撤退の経緯を話し合った。私も独りになっていたところに旧嵯岡の戦友と合流できたのはこの上なく心強く自分に安心と勇気を与えてくれた。

後日、聞けば嵯岡の守備隊はほとんど戦死されたとのことであった。

九、斬込隊に参加

十一日から始まった二地区に対する攻撃は十二日にはいよいよ激しくなり、敵の戦車は右から左からと我

が方目がけて射ってくる。

十三日になると敵の戦車五〇両位が横一線になって進撃してくる。また敵の歩兵部隊も戦車の援護を受けて前進し来り二〇〇メートル前方まで迫ってきて肉眼でもはっきり見える。然し我々には「撃て」の号令は掛らない。「何故だ」一発射てば日本軍のいる位置を教えることになり、その何十倍かのお返しができるからだ。

昼間はソ連軍の独断場で戦車砲、大砲で我が散兵壕に砲弾の雨を降らし、その砲煙と土煙りで先程まで見えたソ連軍の歩兵部隊も見えなくなる。だが我方にはこれに反撃する大砲がない。このソ連軍の猛攻をじっと我慢して夜を待つのみであった。

彼等は日本軍の夜襲を恐れて夕方になると一部歩兵部隊を残して戦車は後方基地まで一旦下がり、夜明けと共に前日に増した攻撃を仕掛けてくるのであった。

前線に残されたソ連の歩兵部隊は日本軍の肉迫攻撃が怖く、照明弾を打ち上げては日本軍の接近を警戒していた。しかし我が軍は一〇名から一五名が一組とな

り斬込隊を編成しては夜襲を掛け、武器弾薬を分捕り、翌日は分捕った武器を使って敵と戦うなど、勇敢というか、悲惨というか、形容のし難い戦いであった。

十三日の夜、私もこの斬込隊に参加して行った。敵は日本軍の夜襲に気付いたのか大きな照明弾を打ち上げ辺りを真昼のごとく照らし出し直ちに機関銃（マンドリン）をもつて無茶苦茶に撃つて来た。敵の反撃に合いしばし身動きも出来ず壕内に伏せたまま敵の反撃を避けた。やがて銃声も遠ざかり前進せんとして隣の戦友に「おい」と声をかけたが返事がない。見れば前方を睨んだまま銃弾を受けて最後を遂げていた。

八月十四日昼過ぎ敵戦車が我々のすぐ前まで来た。これを見た田村見習士官が、あの戦車を分捕るんだと一人敵弾の中へ壕を飛び出していった。これを見て驚いた森永曹長と私が「危ないから止め」と叫んだが気が立っていた田村見習士官の耳に入らず、十二、三歩前進した処で敵弾を頭に受け倒れた。曹長と私が直ちに駆け寄り声をかけたが拳銃を握ったまま即死であった。早速ポケットから手帳など遺品を持ち帰っていた

が、終戦となり武装解除の際この遺品も取られてしまった。

十、総攻撃準備命令

二地区を包囲していたソ連軍は連日の猛攻を以て日本軍を圧迫し、包囲網を逐次縮小し、十六日には陣地の本坑にまで敵弾が打ち込まれるようになり戦闘はますます熾烈を極め、最終の様相を呈してきた。これ以上後退も出来ない、いよいよ十七日の夜総攻撃の命が下った。

総攻撃といつても敵の戦車や大砲に対して我が方は小銃か急造爆雷、中には小銃さえない者もいる。彼我の武器の差は歴然たる中に我が身を飛び込ませるのだ。いよいよ玉碎かな、否、そうと決まった訳ではない、戦争は敵を倒せば勝利者になれる。とにかく敵を倒すことだと我が身に言い聞かせる。

誰が探してきたのか酒の代りにアルコールで最後の杯を仲間と交わし出撃の命令を待った。ここ数日夜も寝ていないので少量のアルコールでも胃袋にしみわたる。

十一、停戦、降伏

しばらくして届いた命令は総攻撃中止、そのまま待機せよであった。複雑な心境で総攻撃命令が下るのを今か今かと待っていた第一線の壕内兵士は突然の命令変更に関志も冷め、張っていた心身の糸も解けてしばし茫然の態であった。

やがて壕内の兵士から流言が飛び交う。中にはソ連が停戦を申入れてきたのではないかと言う者もいたが、まさか無条件降伏と考えていた者は一人もいなかった。

しかし武器のない我々が、このまま日時を過ごせば、じり貧となって敗北は目に見えていた。それならば、と総攻撃をかけてみたところで勝ち目は無い。ただ、玉砕あるのみであったがこれが日本軍に残された最後の手段であったのだろうが、我々第一線の兵士には何が何だか判らなかつた。

やがて八月十八日の朝、東の空も明けそめた午前六時頃、司令部の丘の上を見れば白い旗が立っている。これを見た将兵は今まで考えても見なかつた敗戦が現

実となり、壕内は騒然としていた。そこに最後の伝令がきて、全員壕から出て広場に集合せよであった。

広場にはソ連兵が機関銃を我々に突きつけて訳の解らぬ言葉で武器を捨てろという。こうなつては何の抵抗もできず言われるがままに持ち物を全部捨てたが、時計や万年筆は捨てろとは言わず、よこせであった。

よく見れば時計など使つたこともないような兵隊ばかりで、中には眼鏡をアクセサリーとでも思つたのか、近視眼者の必需品と知らずに取り上げてゆく者もいた。こんな低級なソ連兵を見ると本当に負けた気もせず、何ともいえない複雑な気持ちであった。

十二、運命の岐路

これで私の日本軍人としての勤めは終わったわけだが実際は日本軍隊は崩壊したのだ。僅か十カ月の軍隊生活の思い出が頭に浮かんでくる。

あの八月九日未明、ソ連軍の不法侵入により満州里の我が部隊は苦難のすえ、漸く札賚諾爾に集結、非戦闘員の脱出にトラックの護衛兵となつて本隊と別れたが万一の場合はどうにもならない。本隊と一緒にいた

方が良かったなあーと途中で思ったこともあったが無事にハイラルに着くことが出来たのであった。

若しあの時本隊と一緒にいたらどうなっただろうか。

本隊八〇〇名は撤退の途中強力なソ連軍戦車部隊に何回も遭遇し、多くの犠牲者を出し、ハイラルにたどり着いた者は僅か数十名であったということを知ると、私もおそらく戦死していたであろう。誠に運命とは「神のみぞ知る」というものである。

十三、多田中尉の思い出

峻崗の第五八六大隊にいた当時、私の中隊長は多田秋衛中尉だった。前述の八木真少尉との関係もあり、とくに目をかけて貰った。

ある日中隊長が外出される時一緒についてこいといわれた。何処に行くのかとお供して行くと満人部落に入り、村長が長老らしき家に入った。しばらく待っていると満人の家族がお茶とお菓子を出してくれる。そのうち中隊長が出てきて、八木お前は先に帰っている、おれは一人で帰るからと言うので先に帰り衛兵所待っている二時間程して真暗闇の中を中隊長が帰って

くる。判ってはいるが、「誰か」と大声で問うと、「お八木か、ご苦労さん」と笑顔で帰營されたことなど度々あった。

その後、私は満州里の向地偵察隊に転属となり、多田中尉はハイラルの独混八〇旅団の司令部に転属された。

私はハイラルに引き揚げてから多田隊長に一度会いたいと激しい戦いの中でも思っていたところ、八月十三日この河南台（二地区）陣地で幸運にも会うことが出来た。そして満州里からの出来事を報告したところ、そうか、元気でよかった、これからも頑張れよと肩を叩かれ、とても嬉しかったことなど今でも忘れられない。だが多田中隊長と会うのもあれが最後になってしまった。

後日聞くとところによれば、多田中尉は旅団司令部の重大な使命を帯び、八月十四日、四方を敵に包囲されているハイラル陣地を脱出して遠く興安嶺に陣する第一一九師団（幸）に向かった。だが当時あの状況下で二〇〇キロも離れた興安嶺まではとても無理な業で、

興安嶺の第一九師団に着いた様子もなく、途中行方不明となつてしまつた。

多田中尉は快活な性格でスポーツマンタイプ、銃剣術も達人でハイラル出立の際も槍を持っていったといふことで、また何よりも部下思いでキビキビして明るく、眞の日本軍人とはこのような人のことを言うのであろう。

何事も苦難に立つと有能な人が全面に押し出されるもの、多田中尉もその例に洩れず、旅団の生死を担つて興安嶺に赴き、ついに還らぬ人となつてしまつた。誠に惜しい人を失つたものだと、今でも私の脳裏から離れない。

十四、無条件降伏と使役

無条件降伏とは最悪である。これでは今後ソ連側と何の交渉をする余地もない。武装解除の際、武器は勿論、時計、万年筆、家族の写真まですべて取り上げられ、着のみ着のままとなり、これからは何事もソ連側の言う通りに動かざるを得なくなつた。

当時、東山の陸軍糧秣廠には、日本軍が使用すべき

膨大な糧秣が貯蔵されていた。

ソ連軍はこれを戦利品として自国に送るべく我々約三〇〇〇名を使役に使い、毎日貨車に積み込み作業を約三ヵ月行い、大量の糧秣をソ連に運び込んだが、その間我々に与えた給与はコウリヤンが主で、それも僅かな量であつたため体力の衰えが甚だしく、貨車積み込み作業中こぼれ落ちた糧秣を拾つて帰り、これを食べたりして飢えを凌ぐ状態であつた。このように糧秣が沢山あるのに日本人には食わせないので再三交渉すれどもソ連側は「勝てば官軍」という顔をして「お前達は負けたんだ」で何事も片付けられてしまつた。

積み込み作業も終わりに近づくと、何やら移動の話が通訳を通して流れ出した。それと時を同じくしてハイラル駅で輸送貨車の準備が始まつた。これを見た一部の人はこの貨車に乗つて日本に帰るのだと言い他の人は、いやシベリアに連れて行かれるのだ、など流言が飛び交い夜になるとコックリさんにお伺いを立てる人など悲喜交々であつた。そのうち駅で作業中の仲間から、今日も日本兵が有蓋貨車で西に向かつて（シベ

リア方面) 行ったという決定的な情報も入って来た。

十一月中旬我々ハイラル部隊のうち約半数の一五〇〇名は準備の出来た貨車に乗り込み行先も判らず唯西に向かつて出発した。

やがて原参謀中佐を中心とした残り一五〇〇名も十一月下旬ハイラルを立ててシベリアに入って行った。

十五、シベリア行き

貨車に揺れること二週間、途中バイカル湖を日本海と間違えることがあつて着いた処はモスコイまで三〇〇〇キロもあるシベリア鉄道沿線の炭鉱街アンゼルスカヤであつた。

収容所に入れられた我々は身体検査の結果、体格に応じて強制労働を強いられた。身体検査は至極幼稚なもので裸になって肉付きを見て一級、二級、三級、病人と分けられる。一級者は炭鉱入りとなつた。私は二級で建設作業に廻された。僅かな食事で絶えず空腹状態の我々には厳しい仕事だつた。中でも夜間の貨車の積み下しは時間かまわず起こされて厳しい寒さと空腹に加えて「ダワイ、ダワイ」の連呼には捕虜の身の悲

しさを味わされた。

十六、シラミとの戦い

アンゼルスカヤに来て初めての冬と慣れない捕虜生活、屋外は一面の雪と氷で水も無く洗濯も出来ない。入浴なんか勿論ない。

食べ物が不足なので栄養失調になる。そんな体からシラミは遠慮なく大切な血を吸い取ってゆく。夜になるとシラミが活動を始め痒くて寝てられない。夜中に皆が起きて電灯の下でシラミつぶしが大繁盛であつた。

十七、炭鉱作業

シベリアの冬の寒さは厳しく零下四〇〜五〇度まで下がることもある。地上の作業は零下四〇度になると中止となるが、それが一冬に三回位休みとなる。その時は収容所内で待機しているが、「働かざる者喰うべからず」の国柄だけあつて遊ばせておくようなことはない。代替えの作業を命じてくる。その中には炭鉱作業もある。一年に一回炭鉱に入ったことがある。

二十二年の時は増産日といつたので地上作業の各班が

らも相当数の人が炭鉱に入った。この時は日本人だけでなくソ連人も各職場から大勢応援に狩り出されていった。ソ連人も炭鉱は初めてらしく、こんな危険な仕事は御免だといってろくに働かないばかりか、私に対しても「ヤポンスキー（日本人）危ないから仕事などしなくてよい、安全な処で要領よく休んでいろ」と誘って来て大変助かったこともあった。

この大きな炭鉱も戦争で機械化が遅れ、坑道を頭に小さなカンテラ付けて腰を曲げて支柱の折れている間を這うようにして歩かねばならない所が沢山あり、増産々々で安全対策は後回しという状態だから仲間の多くが事故で亡くなっている。

地上での作業は自動車の上乗り、電話局の外線修理等もやったが個人住宅にいつて作業していると、主婦が同情してくれて食事の御馳走や黒パンやタバコをくれる家もあって大分助かった。ソ連では共産党員は厳しいが一般国民、特に婦人は人種差別もせず、男性はウソを言うことが多いが女性是比较的正直であった。

十八、帰 国（ダモイ）

昭和二十三年も十月となり、寒さと雪で本格的な冬に向かいつつあったある日、作業から帰ると仲間から八木君に帰国（ダモイ）の命令が出たそうだと聞かされた。いつものウソだろうと半信半疑だったが、病弱者も一緒に五〇名と聞いて、これは本当だと思いい嬉しさの余りその夜は一睡もできなかった。

命令が出た翌日はもう出発である。我々の荷物は小さな袋一つであり用意はすぐできた。仲間と別れを告げアンセルスカヤの駅に向かった。我々の乗った輸送貨車は東に走り、バイカル湖畔を通過してナホトカに向かっているがアクチブ（共産主義運動員）が乗り込んでいて毎日毎日共産主義の教育である。こちらは身体でいやという程、共産主義の悪い所を体験しているから「なに言ってるんだ」と反撥したくなったが、船に乗るまでは我慢せねばと如何にも共産主義に心酔しているように表面をつくらっていた。

ナホトカに着いて見たら運動はますます盛んであったが、十一月二十八日無事帰還船「永徳丸」に乗るこ

とができた。

ナホトカ港を離れた船上では、今までの仕返しだと今まで威張っていたアクチブの連中を吊るし上げてやつつける出来事もあった。

上陸後のいろいろな調査も終わり、私の帰るべき名古屋の地図を見ると、爆撃で焼野原になり、我が家はあるのか、家族は無事か心配になってきた。十二月四日帰る列車の中で、八木文吉さん家族が名古屋駅に迎えにきていますとの連絡を聞きホッとした。

名古屋で下車すると妻と親戚の人達が迎えにきてくれ、お互いに涙を流しながら抱きあつて喜んだ。

十九、帰国から今日

これからは自分のため、家族のためにも頑張らねばと留守中に荒廃した田や畑を部落の皆さんと相談して改善を計り、一応の成果を上げることができ、農業も軌道に乗ってきた。これで家族の生計も立ったと、今までの苦勞を思い出しながら喜びを噛みしめていた。

こんな私の喜びも束の間、昭和三十年秋、伊勢湾を中心に荒れ狂った台風は満潮時と重なって高波とな

り、既設の護岸堤防を乗り越えて部落を襲い、家屋、田畑は勿論、最愛の家族六人をも一瞬のうちに失ってしまったのである。

私は一時生きる気力も失い途方にくれたが、あの満州里からハイラルへの撤退、ハイラルでのソ連軍との死闘、シベリアでの苦闘などで多くの戦友を亡くしたのに、天は私を護ってくれ今日まで生きてきた。あの戦場で散った戦友や、台風で亡くなった家族六人のことを思うとき、此処で挫けてなんとする、残った子供のためにも頑張らねばと、無一文から再び努力に努力を重ね、ようやく今日の幸せを得ることが出来た。

今や祖国日本は、終戦後国民の努力の甲斐あつて、世界の経済大国となり平和を甘受しているが、世界は絶えず流動している。

先進国といわれる日本国民は、先進国民らしく世界平和のために努力、精進しなければならない。

ホロンバイルの戦場で戦死された戦友、酷寒と栄養失調で死亡された多くの同志の御霊に心から御冥福を祈つて止みません。

【解 説】

執筆者の属した独立歩兵第五八六大隊は独立混成第八十旅団隷下で、第一一九師団と共にハイラル（海拉爾）正面でソ連第三十六軍と戦闘したのである。

地誌によると海拉爾正面の国境から大興安嶺の間は一望千里のホロンバイル平原で乾燥した草原であり、その中の河川・湿地・湖沼などが局地的に点在するのである。昭和十四年ノモンハン事件の時、ソ連極東軍はここを進撃して来たのである。

海拉爾南方約二〇〇キロのノモンハン付近を南の境界とする興安北省には蒙古遊牧民四〇五万人が散在している。海拉爾は人口約三万人のこの地方第一の都市で、次が満州里である。

ハイラル兵団（第一一九師団・独混八十旅団）に対する関東軍第四軍作戦指導方針は、

「ハイラル兵団は大興安嶺開嶺付近に構築中の陣地を防御の主線とし、別に有力な部隊をハイラル陣地に配置して、まず努めて長く敵の前進を妨害したる後、自ら配置する前地抵抗と相まって、その主線において

来攻する敵を撃破する。・・・」

開戦時の配備概要は次のようである。

第一一九師団主力は大興安嶺において陣地構築中であり、師団司令部直轄（隷下部隊・独混第八十旅団の部隊を含む）の警備隊、監視隊を国境近くに配備し、司令部および各部隊の一部はハイラル屯営に残留。独混第八十旅団は主力をもってハイラル陣地を占領、有力な一部を第一一九師団司令部の警戒監視組織の一部として国境近くに出し、さらにウヌール陣地（大興安嶺は未完成で変更構築中）にも有力な部隊を配置するほか各独立大隊の一部を大興安嶺陣地の構築支援に派遣していた。

独歩第五八六大隊は、本部等を満州里、第二中隊、歩兵砲をジャライノウル、第四中隊を磋崗、第一、第三、機関銃中隊をハイラルⅣ地区に配置。

ハイラル地区の独混第八十旅団はかねての計画に従いⅠⅤ地区陣地を占領した。夜明けにハイラル市街に空襲があったが軍に被害なし。

ハイラルⅠ地区、独歩第五八四大隊ほか。

Ⅱ地区、旅団司令部・独歩第五八三大隊、旅団挺進大隊、砲兵隊、工兵隊、通信隊各主力、歩兵第二五三連隊約三三〇名、同二五五連隊約一七〇名、迫撃砲第十七大隊約一三〇名、特設警備隊第六〇六大隊約二〇〇名、ハイラル憲兵隊約一〇〇名、警察約一一〇名等、合計約三、〇〇〇名。

Ⅲ地区、独歩第五八七大隊、旅団挺進大隊第三中隊、同砲兵第一中隊、特設警備隊第六〇六大隊、第四十六兵站警備隊、国境警察隊、特務機関等計一、〇〇〇名。

Ⅳ地区、独歩第五八六大隊第一中隊、第三機関銃中隊および迫撃砲第十七大隊約三〇名、主力は陵西陣地、一部を二・五キロ東方の陵東陣地、さらに南東二キロに前進陣地を配備した。Ⅳ地区はソ連軍進攻正面ではなく十日来小戦のみ。しかし、他地区の戦況不利と判断した第一中隊長は十二日、ハイラル南方一四キロの遊撃拠点に撤退決意し各隊に集結を命じたが、部下の掌握困難となり、多数の者が分かれて興安嶺に後退した。十三日朝、遊撃拠点梅ヶ丘陣地に到達したのは約一〇〇名、ソ連軍と交戦包囲されたが沢田准尉以下三

〇余名は脱出した。しかし、山岡、豊田各隊はこの戦闘でほとんど全滅したものと判断、戦闘参加者中帰還者一名もなし。

Ⅴ地区ほか、独歩第五八四大隊第三中隊一部、挺進大隊第一、二中隊一部、迫撃砲第十七大隊第二中隊その他、包囲されたが停戦まで全陣地を保持、その間敵飛行機一機撃破。ハイラル南方四〇キロの哈南陣地、独歩第五八三大隊第四中隊、旅団挺進第三中隊の一部はいずれも交戦せず大興安嶺陣地に後退した。

Ⅰ地区は、壕には死体累々とし地区指揮官竹中少佐、ほか配属二中隊の指揮官を含み二六〇名戦死。Ⅱ地区、停戦まで戦死約五六〇名。Ⅲ地区、停戦命令まで陣地保持、家族全員自決。